
Happy Future

さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Happy Future

【Nコード】

N1824K

【作者名】

さくら

【あらすじ】

クロウ・リードの作った『クロウカード』を集め、新たな主となつた『木之本さくら』。

さくらは中学二年生になり、平和に暮らしていた。

しかし、ある日突然、異世界からの旅人達が現れた！

彼らの求める『羽根』と一緒に探す事にしたさくら達は、だんだんと不思議な事件に巻き込まれていく…

第一話　いつもの朝―（前書き）

この小説は、さくら達が異世界の旅人達の訪問と、『羽根』で不思議な事件に巻き込まれるお話です。

なので残酷ではないにしろ、少し、CCさくらとは違う感じになるかもしれません。

そんなの嫌！という方はご遠慮下さい。

ですが、大きく変わるわけではございません。

第一話　いつもの朝

「ほええ——！！遅刻しちゃうよ——！！」

『木之本さくら』はいつものごとく寝坊して、大急ぎで準備している。

中学生になっても寝坊は直らない。

机の引き出しからは『封印の獣　ケルベロス』こと『ケロちゃん』が呆れ顔を見せている。

「さくらの寝坊癖は全然なおらんなあ？」

「そんなこと言っただってー……」

さくらはケロちゃんに少々言い訳をする……が、

「？もうこんな時間！じゃあ行って来るね！」

「しっかり勉強しいやー」

ばたばたと階段を下りて、リビングに入る。

「おはようー！」

「おはよう。さくらさん」

「おそよう」

さくらが挨拶すると父、『木之本藤隆』と兄、『木之本桃矢』もそ

れぞれ返す。

「（む！）お・は・よ・う！」

「おーそーようー。怪獣」

「さくら怪獣じゃないもん！ってこんなことしてる場合じゃないよ
~~~~~！！」

さくらは、朝食を三分（最新記録）で食べると、家を飛び出た。

「ひっへひはーふ！！（いってきまーす）」

「いってらっしゃーい」

がらっ！

「おはようー！」

「「「おはようー」」」

「はやかっ たねー」

「さすがさくらちゃん！」

教室に入ると、友人たちが挨拶してくれる。

そして、校庭から教室までの速さをほめてくれる。（さくらは少し  
複雑）

「おはようー！知世ちゃん、小狼君！」

「おはようございます。さくらちゃん」

「おはよう。さくら」

次にさくらは必ず、現在お付き合い中の彼氏、『李小狼』と、親友の『大道寺知世』に挨拶する。

すると、知世と小狼も笑って挨拶をした。

朝はいつもと同じだった。

挨拶をすませ席につき、知世と小狼と少しおしゃべり（といっても小狼は聞き手）をする。

しかしこの後、いつもとは全く違う事が起こった――

## 第一話　いつもの朝―（後書き）

はい。めちゃくちゃです。

とにかく、つまらない話にしないよう頑張ります…（――；）

## 第二話 - 異世界からの訪問者 - (前書き)

平和な日常に新たな事件か——！！！！？？

## 第二話 - 異世界からの訪問者 -

「そういえば、今日、不思議…というか、妙な夢を見たんだ」  
小狼が言った

「妙な夢…ですか？」

「どんな夢？」

さくらと知世は気になったので聞いてみた

「ああ。実は――」

小狼が言おうとすると…

がらっ

「席につけー」

前の扉が開いて先生が入って来た

キンコーンカーンコーン

とチャイムが鳴る

「あ」

「先生が来てしまいましたわ」

「じゃああとで話すよ」

「うん」

「起立」

週直の生徒が声をかける

「」「」「おはようございます。」「」「」

「着席」

「全員いるな。」

先生が出席者を確認する

「委員会、係から報告はありますかー？」

「はい。文化委員からありますー！今度の文化祭ですが、合唱が良  
いか劇が良いかアンケートをとりまーす。

紙を配るので記入してください」

教室がざわざわと騒ぐ

「文化祭だつてさ」

「どっちが良いかなー？」

「楽しみだねー」

などと声が聞こえる

「小狼君、知世ちゃん。どっちにする？」

さくらは知世と小狼に相談する

「どっちも捨てがたいですわ…」

「おれはどっちも苦手だからなあ…」

「でも小狼君演技上手だよ？王子様」

うーん… と悩んでいる小狼にさくらは言う

あれは決して下手では無かった

それに小狼は少し困る

「あれは仕方なかったし…」

「悩みますわ…」

「うーん…私劇にしよう！歌はそんなに得意じゃないもん」

「そんなことありませんわ。さくらちゃんの歌は本当に素敵ですよ」

「おれもそう思う」

「知世ちゃんの方が上手だよ。ねえどっちにした？」

「私も劇ですわ」

にこつと笑う知世と、う となる小狼

「おれはまだ決めてない…。うーん…劇と歌…なら…」

小狼はシャーペンをすべらせた

「どっち？」

「劇。こっちの方が大道具とかあるから」

「「（小狼君／李君は絶対役になるよ／なりますわ）」」

「じゃあうしろから集めてください」

「他にありますかー？」

手は拳がらない

「じゃあ先生お願いします」

「今日は放課後に委員会活動があるから、忘れないようになー。じゃ、HRを終わる」

キンコンカーンコン...

ガタガタガタ...

「小狼君。夢って？」

「そうですね」

さくらと知世は先程の夢の話をつる

「ああ。詳しくは言えないんだけど...

「どうして？」

「夢の中の...夢に出てきた人がこれは時が来るまで他言するなって」

「人が出てきたの？」

「ああ。夢を渡って来たって言ってた」

「夢を？」

「それで...

小狼が答えようとした時...

キイイイイイイイ

突然、こんな音が鳴った

「何!？」

「なんの音だよ!」

当然教室はパニックになる

無論、さくら達も

「なに！？」

「これは…！？…！」

「何が起きてるの？」

「来る！」

「何がですの！？」

天井がうねって落ちてくる

「異世界の奴らだ！」

「異世界！？」

パン！

落ちてきたものが割れて

中から四人、人間が現れた…

## 第二話 - 異世界からの訪問者 - (後書き)

だんだんと絡んできました

実は小狼。けっこう夢でいていたりいなかったり…？

無駄に長い…

さくら達は今は中二です。

第三話 - 新たな出会い? - (前書き)

天井から人が…???

### 第三話 - 新たな出会い？ -

ガタガタガタタ——ン！

落ちた衝撃で机がぶつかり合う

「ぶうつ！ 次の世界に到着ー！」

妙な生物が跳ねながら言う

「いやー派手に落ちたねえ」

一人はのんびりと

「もつとましなところに落とせねえのか！ この白饅頭！」

一人は怒って

「姫。お怪我はありませんか？」

「大丈夫。びつくりしただけ」

そして二人は自分達（？）の状況を確かめ合っている

天井から落ちてきた（？）人達はそんな会話をしていた

四人（＋妙な生物）の特徴は

一人は金髪で白いコートを着てる笑顔の男

一人は黒髪でつんつん頭。黒のマントを着ている仏頂面の大男

一人は茶色の少し癖のある髪、深緑のマントをきた同い年くらいの少年

一人は薄い茶色（？）のショートヘアーで、

ピンクのマントを着た同い年くらいの少女

そして白くて額と耳に赤い石？をつけたウサギのようなしゃべる不思議生物

「木之本さん！？ 李！？」

「さくらちゃん！？ に李君！？」

クラスの子達がザワツと騒ぐ

それに驚くのはさくらだ

「ほえ！？わたしここにいるよ！小狼君も！」

「え？ええ！？」

「でも…！」

みんな口々にさくらと小狼の名前を言う

そう！なんと！出てきた少年と少女はさくらと小狼に瓜二つなのだ！

「あれえ？なんか人いつぱい？」

「あ…あの…」

「おい！おまえらなんなんだ！？」

「えと…」

「お前李なのか！？」

「李？」

「木之本さんなの？」

「木之…本？」

クラスみんなは次々に周りに集まる

そこへ

「ちよつといいか？」

小狼が声をかけた

「小狼君！」

さくらも続く

その後ろに知世も続いた

さくらと小狼を見た四人と一匹（？）は目を丸くした

「おっおれ！？」

「私がいる…！」

「シャオランとサクラだー！」

「うわーすごいねえ」

「マジかよ…」

「ちよつと聞きたい事がある」

小狼は言った

「んー？なにかなあ？」

金髪の人が答えた

「あのつ、まず名前を教えてくださいませんか？」

さくらが質問する

「そうだねえ。オレはファイ。で、この子がシャオラン君」

ファイ という金髪の方は少年を指す

「シャオランです」

「李と同じ名前！？」

「沢田。落ち着けて」

どうやら騒いでるクラスメートは沢田というらしい

小狼はそんな沢田をなだめる

しかし

「おま！何でそんな冷静なんだよ！お前がいんだぞ！」

「いいから落ち着けて（汗）」

やはり、興奮は収まらない

ファイ という人は紹介を続ける

「それでねえ？こつちがサクラちゃん」

こんどは少女を指す

「サクラです」

「ここ今度は木之本さん！？」

「わたしと同じ……！？？ほええ！？」

「さくら、沢田。落ち着けて」

「あと、この白くてかわいいのが」

「モコナ」モドキ！モコナって呼んで！

「ウサギがしゃべった——！！！」

「ウサギじゃないって……」

「でね？こつちの黒いのが黒びつぴ！」

「黒びつぴじゃねえ！黒鋼だ！」

黒び…黒鋼 という人は叫んだ

「では、こちらでも自己紹介いたしますわ」

トモヨひめ  
「知世姫!？」

黒鋼は知世を見て言った

「? 確かに私は知世ですが…」

「大道寺は知世姫じゃないぞ」

「あ？」

「大道寺知世と申します。」

「よろしくお願いします。」

シャオランとサクラはペコリとお辞儀した

「私は木之本さくら!」

「おれは李小狼」

「やっぱり同じ名前なんだね」

さくら、小狼、知世は普通に(?)話している

クラスみんなは啞然とした

いや、実はもうチャイムが鳴っていて先生も来ている

先生はもつと啞然としていた

「じゃ、次の質問だ」

「はい」

今度はシャオランが答えた

「…お前たちは…異世界から来たのか？」

「え!？」

「そういえば小狼君。異世界の人だ!って言ってたね」

小狼はこくりとうなずいた

「李!どういう事だ!？」

「えつと…先生!」

「(ハッ)な…なんだ？」

「おれとさくらと大道寺早退します!」

「え!？」

「貴方たちもおれについて来てくれ」

「え？あ、はい」

小狼は手早く三人分の帰り支度をする

意味が分かったさくらと知世もそれを手伝う

…というよりそれぞれ教科書を鞆に入れた

「じゃあ！」

「みんなまた明日ね！」

「さようなら」

「なんかすいません！」

「片付けなくてごめんなさい！」

「バイバーイ！」

さくら達とシャオラン達は教室を出ていった

「…嵐が去った…」

第三話 - 新たな出会い？ - (後書き)

えーと… とりあえず出会いました。  
次回はたぶんいろいろと分かります。

#### 第四話 - 小狼の見た夢 - (前書き)

一行はさくらや知世の家に行くわけにはいかないので、  
小狼の家に行った

## 第四話 - 小狼の見た夢 -

小狼宅…

「で、異世界からきたのか？」

小狼は一応確認をする

「…はい。おれ達は異世界を旅しています。」

それに当然、シャオランは頷いた

そこでサクラがある疑問を投げかける

「あの…どうして私達を知ってるの？」

「あ！わたしもそれ気になる！」

さくらも同意する

「ああ。教えてもらってたんだ」

小狼は思い出した様に言った

「誰にだ」

黒鋼は少し強く言う

小狼に教えた者が旅を監視している者だったら小狼は敵なのだ  
ならば、仲良くすることなど、絶対に出来ない

しかし小狼は知世をちらっと見て、黒鋼を見ると少し微笑みながら  
言った

「知世姫さ」

「何いい！？」

「まあ…！」

黒鋼は叫んだ

知世も驚いている

まあ、当たり前だが

もちろん、他の人達も

「知世姫って…」

「知世ちゃん!？」

「知世姫さんって確か黒鋼さんの…」

「黒様んとこのお姫様だよねー？」

「黒鋼の事送った人！」

「話すよ。見た夢のこと」

「なんだ?ここ…」

おれは気がついたら知らない場所にいた

そこは真っ暗だったけど、怖くは無かった

なぜか、桜の花も咲いていた

そんな事を考えている時に話し掛けられた

「小狼さん」

「!?! だっ 大道寺!？」

その人は大道寺にそっくりだった

「いいえ。私は知世。ですが、あなたの知っている知世ではありませんわ」

知世姫は首をゆっくりと振った

「え…? どういうことだ…?」

おれは訳がわからず、疑問符を浮かべるだけだった  
そんなおれに、姫は語った

「今、私は夢を渡ってあなたと会っています。」

「夢を…?」

「はい。」

姫は微笑んだ

そんな姫に気になった事を聞いてみた

「さっきおれの知ってる大道寺じゃないって言うていたけど、どういう事だ？」

「世界…次元は一つではありません。いろんな世界があります。あなたの世界と私の世界は異なる世界」

「違う世界…」

おれは最初こそ、よくわからなかった

「異なる次元には魂の同じ…分かりやすく言えば、姿形や名前の同じ、違う人生を送る方が存在します。」

私の魂はあなたの世界の知世と同じです。」

「なんとなく分かった…」

おれが納得すると、また、嬉しそうに笑った

「私は日本国で姫巫女をやっています。」

「じゃああなたの事は知世姫とでも呼べばいいか？」

「お好きなように。」

「でもどうして…」

「お伝えしたい事があります。」

姫は真剣な顔になった

おれも自然に緊張した

「今度、あなた方の世界に次元を旅する人達が来ます。」

「え…？」

「その中には、あなたと同じ魂の方とさくらちゃんと同じ魂の方がいらっしやいますわ」

「え！？」

姫の話は唐突で、ただただ驚く事しかできなかった

「その方達はそのサクラちゃんの「記憶の羽根」を探して旅をしています。」

「記憶の羽根…それが、この世界にあるのか？」

「はい。でも、とても危険です。それに貴方達の世界は彼らが今まで行った世界とは随分異なる世界…。」

それに、貴方と同じ魂の方とさくらちゃんと同じ魂の方の世界にいた方々が

貴方の世界にはたくさんいらっしやいます。

ですが当然、知り合いではありません。だから貴方と会いました。」

「…」

その時の姫は、思いつめている様に見えた

「彼らを手助けしてくれますか？」

「…それがその人達におれが出来る事なら…やる。」

おれがそう答えると

「…やはり、同じですわ」

と、また、嬉しそうに笑った

その意味がわからなかった

だから

「え？」

としか言っていない

それから姫はこう言った

「この後、貴方はもう一人、夢で会われます。その方は貴方ととても近い方…。」

「もう一人？」

「では、お願いいたします。」

「…ああ。」

「そうだったんだ…」

「だから俺たちの事、しってたんですね」

「ああ。そうだ。黒鋼さん」

「んあ？」

「知世姫が言っていた。あなたなら真の強さを見つけられる。元気で過ごして下さい」と

「……」

「わたしも会ってみたいな…。その知世ちゃんに」

「私もですわ」

「私も」

「おれも会ってみたいです。」

「会えるといいな」

みんなで笑いあった…

#### 第四話 - 小狼の見た夢 - (後書き)

今回は知世姫と小狼ですね！

次回は… あはは…；；

## 第五話 ・この世界で ・

「と、言う事は…この世界に羽根はあるんですね!」  
シャオランは嬉しそうに言った

「まあそうなる」

「じゃあ羽根見つかるまで、この世界にいないとねー。宿さがさな  
きゃー」

ファイが「近くに宿ってあるー?」と聞いてくる

「宿はありませんわ…」

「うん…」

「なら、このまま家にいたらどうだ?」

小狼がそう言った

「え!?!」

「いいのー?」

ファイが笑いながら聞く

「ああ。おれは1人暮らしだから」

「でも迷惑じゃ…」

「全然」

小狼は笑う

「ありがとう。小狼君」

「え…あ…ああ」

サクラに言われると少し戸惑う小狼だった（笑）

「では、服は私が用意しますわ!」

知世が少し高いトーンで言った

「え!?!」

「お任せ下さい!皆さんにぴったりの服をご用意しますわ!」

「でも服まで…」

シャオランが遠慮がちに言う

「私がやりたいんですわ」

そんなシャオランに優しく笑う

そんな知世に、シャオランもサクラも優しく笑った

「…ありがとうございます」

「ありがとう」

シャオランとサクラのお礼ににっこりと知世は笑った

「わたしは何か出来ないかな…」

うつゝ　と考えるさくら

「…じゃあ、この世界の事、いろいろ教えて？」

とサクラが言うときくらはパアッつと笑顔になる

「うん！たくさん教えるね！」

2人は笑いあった

「あと…」

「羽根探しも…」な

「お手伝いしますわ」

さくら、小狼、知世はそう言った

「本当ーっ？ありがとうございます！さくら！小狼！知世！」

「本当にいろいろありがとうございます！」

「わたし達がやりたいだけだよ！」

「そうですわ」

「ああ」

こうしてシャオラン達のこの世界での生活が始まった――

## 第六話 - 仲良く -

「あ、もうこんな時間なんだ。」

さくらが時計を見て言ったその時…

くうううう

くうううう

「あ…／／／」

さくらとサクラのおながになった

「ご、ごめんなさい…」

「もうお昼ですから^^」

「モコナもおなかすいたー！」

「そうだな。なにか作るよ」

小狼は立ち上がった

「あ、わたし手伝うよ！」

「私も手伝います！」

「あ、おれも手伝います！」

さくらとサクラ、そしてシャオランも立ち上がる

しかし、小狼はきょんとしている

「大丈夫だ。昼食くらいは一人で作れるよ。いつもやってるし」  
小狼は少し笑って言う

「でもでも…！」

「何かしたいんです！」

「お願いします！」

しかし、3人共諦めない

「…じゃあ、頼む」

そんな三人に負けたのか、素直に頼む事にした  
三人の顔が晴れる

「うん！」

「はい！」

「モコナもお手伝いするー！」

ぴょんつと小狼の肩に乗るモコナ

「ああ。ありがとう」

4人（とモコナ）はキッチンへ向かった

「もうすっかり仲良しだねえ」

ファイが笑いながら言う

「そうですね」

知世は優しい目をして、4人を見ながら同意した

「同じ顔だな」

言葉と裏腹に少し笑っている黒鋼

「でも、1人1人違う人間ですから。さくらちゃんにサクラちゃん。  
李君に小狼さん」

「そうそう、黒ろんも知世ちゃんと仲良くしたら？」

にひひ と笑うファイ

「うるせえ！！」

そんなファイに怒鳴る黒鋼と

「おほほ」

と、いつもの調子で笑う知世

こちらの3人も結構仲良くなっている（と思われる）

キッチンでは…

「わあ！大きいフライパン！」

「こんなの見たことないです！」

「すごいすごい！」

サクラとシャオランの国はこうゆう物は無いらしく  
物珍しそうに見ている

モコナも知ってはいるが、見たことは無いらしい

「あ、それは中華鍋だ」

「「中華鍋？」」

2人とも「？」となっている

モコナは「うふふ」と笑っている

「それで中華料理をつくるんだよ」

さくらは準備をしながら言った

「ちゅうかりようり？」

チャーハン チャーハン マーボ マーボ ドウフ ドウフ モモマン モモマン ジュウ ジュウ  
「炒飯とか麻婆豆腐とか桃饅頭とか」

「あ、桃饅頭は知ってます！高麗国 コリョク で食べました。」

「おいしいよね！」

「モコナも桃饅頭大好きー！」

サクラとシャオランとモコナは桃饅頭の味を思い出す  
それと同時に思い出も

「じゃあ昼食は中華にするか」

「うん！そうだね！」

「「はい！」」

「わーい！」

ひとしきりおしゃべり（？）した後、やっと手を動かし始めた

「ブリアとか、ココットもおいしいんだよ」

サクラは動かしていた手をいったん止めて言った

「そうですね。あと、パーユやファルもおいしいです」

シャオランも言うが、手は止まっていな

「わたしもあれ大好き！」

「おいしいですね」

二人の話はだんだんと盛り上がるが…

「ぶりあ？ここつと？」

「ぱーゆ？ふある？」

「なあに？それ」

さくらと小狼とモコナは聞いたことの無い料理の名前に頭は疑問符だらけだ

そんな三人にサクラが説明する

「クロウこく玖楼国の料理なの」

「この国には無いんですね」

「う…うん…。……クロウ国！？」

「あ、言ってますでしたっけ」

「ほえ」

そんなこんなで、さくら達は料理を再開した

## 第七話　・悪しき者・

うす暗い部屋…

不穏な空気が漂う…

そんな中に、一人の女性がいた

「ふーん？こんな物がそーんなにすごいんだあ？」

女性はカプセルに入っている「あるもの」を見て言う

「そうだ。」

それに答えたのは一人の男性だった

「そんな風に見えないけど…？ね、これ、出しちゃだめ？

そしたら力も感じることも出来るしいゝ」

「はあ…少しは黙れないのかリモラ」

男性は呆れた口調で言う

どうやら女性はリモラというらしい

「ガプゼは無口すぎんのよおゝ！もつとはじければあゝ？」

リモラは男性——ガプゼに反論する

「うるさい。読書が出来ない」

「つまらないのゝ！」

リモラはブーッと頬を膨らませた  
そこへ

カツ——ン

足音が響く

するとリモラとガプゼは姿勢を正した

その視線の先には黒いマントを着た男がいた

「手にいれたか」

「はい。間違いなく、ここに」

黒いマントを着ている男が

「ふん。それぐらいのこと、こなしてもらわないとな」と不気味に笑う

「でも、本当にこんなものが必要なんですかあ？ゲズビダ様あ」

「言葉をつつしめ！リモラ！」

ゴンッとガプゼがリモラの後頭部を殴った

「いったあ——いい！なによ！今、本気でやんなかった！？私も怒るよ！？」

「つつしめといってんだろ！ボケ！」

「ああ——！ボケとはなに——！！？」

リモラはそう言ってジタンダを踏んだあと、ゲズビダに向き直った

「ねえ？その魔力を持つ子達って、私たちが「これ」使わないといけないほど強いのか？」

リモラがすまして言う

「ふっ… あった方が楽だというだけだ

この羽根を使えばな…」

ゲズビダはカプセルの中身——「サクラの羽根」を見ながら言った

「ふう〜ん…なんか面白そうねえ」

「はあ…口をつつしめ…」

「いーのよ！」

「…はあ」

「ふっ…この羽根を使えば、私は飛王<sup>フエイワン</sup>…いや

あの、クロウ・リードだって超えられるのだ…

あの力を奪えばな…

あの、この世界で今、1・2を争う程の魔力を持つ者達の…

——『木之本桜』と『李小狼』の魔力を奪えば…」

ゲズビダの低く、不気味な高笑いが響いた…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1824k/>

---

Happy Future

2011年10月6日20時09分発行